
儂き花と永久の夢

雪原歌乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

儚き花と永久の夢

【Nコード】

N6619V

【作者名】

雪原歌乃

【あらすじ】

此方は長編現代和風幻想『夢現に舞う』南條×美咲（美咲視点）の話となっております。

本編との関連は殆どございません。

PG12指定。

（前書き）

此方は長編現代和風幻想『夢現に舞う』南條×美咲（美咲視点）の話となっております。

本編との関連は殆どございません。
P G 1 2 指定。

修業のために聖地へ来てから、だいぶ時間が経過していた。リビングの壁に掲げられたカレンダーは、七月から八月へと変わっている。「あ、そう言えば」

みんなで朝食を摂っている時、何かを思い出したかのように江梨子が不意に口を開いた。

江梨子のその一声に、他の者は、何事か、と言わんばかりに一斉に彼女に視線を向ける。

「今日の夜、この隣町で花火大会があるみたいよ」

「花火大会、ですか？」

江梨子の言葉に真っ先に反応を示したのは美咲だった。

江梨子はそれがよほど嬉しかったらしく、「ええ」とニッコリ笑んだ。

「小さな町だから本当にこじんまりしたものなんだけど、それでも凄く綺麗でお勧めよ」

「その感じだと、江梨子さん、その花火大会に行った事があるんですか？」

「もちろん！初めて行ったのは確か、修業を始めて間もない頃だったと思う。ちょうど今の美咲ちゃんと同じね。あの時は、泰明さんと博和さんの三人で……」

そこまで言いかけて、江梨子はハツとしたように口を噤んだ。

美咲は一瞬、どうしたんだろう、と訝しく思ったが、すぐにその理由を察した。

江梨子が出した二人の男の名前、最初の一人は彼女の夫である樋口であるが、もう一人は亡くなった南條の父親の物だった。

「——ごめん、南條君……」

さすがに不用意な発言をしてしまったと反省したのか、江梨子は心底申し訳なさそうに南條に頭を下げた。

「別に構いませんよ」

気まずそうにしている江梨子に対し、南條は微苦笑を浮かべる。

「花火か……。この辺じゃないですけど、俺も生前、親父に連れて行って貰った記憶がありますよ。と言っても、本当にガキの頃の話なのでおぼろげにしか想い出せませんが」

屈託なく語る南條に、江梨子だけでなく、周りもホッと胸を撫で下ろしていた。

「それじゃあ、今夜は気分転換にみんなで行きましょう！　ずっと修行三昧で、特に美咲ちゃんは、環境が目まぐるしく変わり過ぎたせいで疲れも溜まってるでしょうしね」

すっかり気を善くした江梨子は、いつもの如く弾んだ口調になっていた。

「そうと決まれば即行動ね！　ああ良かった！　私、もしかしたら、つて思つて浴衣を二枚持つて来てたのよー！　無駄にならずに済んだわあ！」

「江梨子……。随分と用意周到だな……」

半ば呆れ気味に言う樋口に対し、江梨子は「当然よ！」と胸を張つて見せた。

「浴衣なんて、年に何度も着られるものじゃないでしょ。それに……」

江梨子は美咲に視線を注いだ。

「私、美咲ちゃんの浴衣姿を見てみたいのよ！　美咲ちゃんなら、絶対可愛く変身するに決まってるもの！」

一瞬、江梨子の目が妖しく光ったように思えた。

上手く説明出来ないものの、美咲もさすがに嫌な予感がした。

「それじゃ、今日は修業はお休み！」

と言うわけで美咲ちゃん、今日はこの私が、更に美少女に変身させてあげるからねえ！」

江梨子の異常とも思える興奮振りに、一同は少々引き気味だった。「あんまり無理させんなよ？」

そんな江梨子に、樋口がやんわりと突っ込みを入れた。

花火を見に行く時間が近付いてきた。

あれから美咲は江梨子の部屋で、着せ替え人形のように散々弄くり回された。

江梨子の持参してきていた浴衣は、紺地に白い花が散りばめられた落ち着いた物と、ピンク地に大輪の花が描かれた可愛らしい感じの物の二種類。その中から、美咲は必然的に後者を着せられる事となった。

ただ、彼女はどちらかと言うとシンプルな物を好む傾向があるから、前者の浴衣の方が良い、と内心思った。だが、江梨子の持ち物だという手前、そんな我が儘も言えなかった。それ以前に、江梨子がやたらと、「美咲ちゃんは絶対、可愛いのが似合うから！」と主張してきたのもあったのだが。

浴衣が決まってからは、着付けをされる前に髪を弄られた。

江梨子によっぽど嬉しかったらしく、意気揚々とブラシを通してながら、ヘアスタイルをあれこれ考えていた。

「美咲ちゃんの髪、最近は伸びてきたから弄り甲斐があるわあ！」そんな事を言いながら、鏡の前で、美咲の髪をアップにしてみたりと色々試していた。

最初は嫌で堪らなかったが、次第にどうでもいいや、という気持ちが始まり、最終的には、江梨子さんに好きなようにして貰おう、とまで考えるようになっていた。

器用な江梨子により、美咲の髪は見事なまでに生まれ変わった。アップにし、ワックスで整えられた髪に、江梨子が用意してきたという、花をモチーフにした髪飾りをさり気なく挿され、それで髪は完成した。

その後はメインとなる着付けが待っていた。

どこで憶えたのか、江梨子は躊躇する事なくてきぱきと浴衣を着せてくれた。あっという間、というほどでもなかったが、それでも、

彼女の作業は早いと感じた。

「よし！ 美咲ちゃんは完璧ね！」

それじゃ、今度は自分のに取りかかるっと！」

江梨子はそう言うなり、美咲の手を一切借りずに、髪の毛のセツトから着付けまで独りで完璧にやってのけてしまった。

美咲はそれを、ただ啞然としながら見つめるのが精一杯であった。

（江梨子さん、ほんとに何者……？）

良くも悪くも、そんな疑問が美咲の中を過ぎった。

「さてと、行きましようか」

全ての作業を終えた江梨子が、呆然としている美咲に声をかけてきた。

「あ、はい」

美咲はハッと我に返り、江梨子の後に続いて部屋を出た。

リビングの前のドアに着くと、江梨子は一旦足を止めた。

「ふふふ……。美咲ちゃんの変身っぷりを見たら、男連中、絶対ビツクリするわよお」

江梨子は美咲に目配せしてから、ドアノブに触れて勢いよく扉を開け放った。

「お待たせえ！」

江梨子の無駄に大きな声を聴き付けた男達は、一斉にこちらに注目した。

「ほらっ！ 美咲ちゃんどう？」

一歩後ろに下がっていた美咲を、江梨子はやや強引に前へと押し出した。

美咲は恥ずかしくて堪らない。殊に、南條にどう思われるかが、彼女が一番気にかかる事だった。

「へえ……。こりゃあ、ほんとに変わったなあ。うん！ 可愛い可愛い！」

そう真っ先に感想を口にしたのは樋口だった。

それに続くように、雅通は「まあ、悪くないんじゃないかねえの」と口の端を上げながら言った。

最後は南條である。だが、肝心の本人は二人と違い、なかなか言葉を発しない。

「ちよつと南條君！ 何か言いなさいよ！」

美咲以上に南條のだんまりが気に食わなかったらしく、江梨子は感想を催促する。

傍から見ても、南條が困惑しているのはよく分かった。だから、感想を無理強いするのはどうだろう、と美咲は思ったのだが。

「——いいんじゃないか」

予想外の一言に、美咲の鼓動は速度を増した。

「もう！ 他に言う事があるだろうに……！」

江梨子はまだまだ不満そうであるが、美咲には充分過ぎる言葉だった。胸だけではない。全身も熱を帯びて熱くなっている。

（これってヤバイよなあ……）

美咲はどうにか落ち着かせようと、小さく深呼吸を繰り返しつつ両側の頬をそれぞれ手で押さえた。

花火会場へは徒歩でやって来た。

江梨子の話によると、車で行っても駐車場は常に満車でなかなか停められないらしい。更に帰りは渋滞に見舞われ、酷い時は車内で朝陽を拝む事になるとも聞かされた。

ただ、歩いて行っただけと言って、すぐに現地に到着するわけでもなく、結局、普段から履き慣れていない下駄を引き摺りながら三十分以上も歩く羽目になった。

そんなわけで、現地に着いた時には早速、足に疲れを感じてしまった。

「大丈夫か？」

足元が覚束なくなっている美咲に、南條が心配そうに訊ねてくる。美咲は「大丈夫です」と、どうにか笑顔を取り繕った。

「——無理するな」

溜め息交じりに呆れ口調で言う南條。分かつてはいたが、南條に強がりには全く通用しないらしい。

「まだ時間はある。その辺で少し休むか？」

美咲を気遣い、南條が訊ねてくる。

それは美咲も有り難かった。しかし、自分一人のためにみんなを引き留めてしまうのも、とも思っていた。

思案に暮れている美咲を南條は一瞥した後、少し先を歩いていた樋口達に「すみません」と声をかけた。

樋口と江梨子、そして雅通は一斉にこちらを見る。

「悪いですけど、ちよつと先に行つててもらえますか？ こいつ、足を痛めてしまっているようなので」

「あららっ！」

南條の言葉に真つ先に反応を示したのは、江梨子だった。

「美咲ちゃん、大丈夫？ 確かに、下駄つて慣れないと凄く疲れるものねえ。」

分かつたわ！ それじゃ、お言葉に甘えて私達は先に行くわね。

あ、別に無理に私達と合流しようとしなくていいから！ 後はこゆつくりとね？」

江梨子の声が妙に弾んでいたのは気のせいであろうか。

美咲は訝しく思ったが、それよりも足の疲れと痛みの方が大きかったので、今の台詞についてはあまり深く考えない事にした。

樋口と雅通、二人の男達の腕を強引に引つ張つた江梨子が去つてから、南條と美咲は休めそうな場所を探した。だが、そうそう良い場所は見付からず、結局、人気のない河原の土手まで行き、ハンカチを敷いて座った。

南條に至つては何も敷かず、そのまま美咲の隣に腰を下ろす。

「浴衣を着るのって、小学校の低学年の時以来ですから」

足首の辺りを擦りながら、美咲は言い訳がましくぼやいた。

そんな美咲を、南條は苦笑を浮かべながら見つめている。

「浴衣に下駄なんて、男には縁がない物だからな。動き辛そうだと
は確かに思うが」

「着るのも一苦労ですしね。——あ、実際に着せてくれたのは江梨
子さんでしたけど」

美咲の言葉に、南條は何を思ったのか、突然、クツクツと忍び笑
いを漏らした。

美咲はギョツとして「ど、どうしたんですか？」と訊ねた。

「いや、悪い」

南條は必死で笑いを抑えると、「ちょっと面白くなってしまった」
と言った。

「江梨子さんの事だ。美咲を着せ替え人形のように扱って、弄られ
ているお前は、『もう、どうにでもして』とか思いながら、げんな
りしていたんだろうと想像したらな」

「——よく分かりましたね」

「考えるまでもないだろ。それに、江梨子さんは美咲が絡むと目の
色を変えるからな。——ただ……」

「『ただ』、何ですか？」

首を傾げながら美咲は訊いたが、南條はそれについては何も答え
ず、「それよりも」と話題を転換した。

「足、どうだ？ 動かせそうか？」

「え？ ああ、ちよつと休めば大丈夫だと思います。——多分……」
最後に『多分』と付け足してしまったのは、どんなに強がりと言
つても、南條に全てを見透かされているであろう事を自覚している
からだった。

案の定、南條は先ほど同様に笑いを噛み殺している。

「忍耐強いのは結構だが、今日ぐらいいは気を緩める。そんなに肩肘
張っていると、折角の花火も楽しめなくなるしな。——それと、立
つてるだけでも辛いなら、俺がどうにかしてやる」

「え……？」

美咲がキョトンとしながら南條を見つめると、南條は口の端を上

げて不敵な笑みを浮かべた。

「お前は軽いから、抱き上げるのはどうって事もない」

「……………」

南條の台詞に美咲は絶句した。そしてそのまま、頬を赤らめて南條から視線を逸らす。

一方、南條は美咲の反応が安易に想像出来ていたらしく、さも愉快そうに笑った。

「——南條さん、笑い過ぎです……………」

不満が絶頂に達した美咲は、心底恨めしそうに南條を上目遣いで睨んだ。

それに出くわした南條は、「わ、悪い」と謝罪を口にしながらも笑い続けた。

「——それにしても」

ようやく落ち着きを取り戻してから、南條は先ほどとは打って変わって、真顔で美咲に視線を注いだ。

「お前は些細な事で一々動揺するから、本当に悪い男に騙されそうだな」

「——それは違うと思いますけど」

南條の言葉に、美咲もさすがに突っ込みを入れた。

「南條さんがあまりにもサラツと言うから、こっちもすぐに反応しちゃうんです……。確かに、南條さんに見てみたら大した事じゃないかも知れませんが、私にとっては、その……、ちょっと触れられるだけでも心臓が破裂しそうになるんです……………」

そこまで言うと、美咲は南條から視線を逸らした。南條の双眸にまともに見つめ続けていたら本当に失神してしまいかねない。大袈裟なようだが、美咲はそう思った。

「——俺も別に、緊張してないわけじゃないんだけどな」

不意に南條が口にした言葉に、美咲は再び顔を上げた。

「当然だが、お前の浴衣姿なんて初めて見るしな。——想像以上に

女らしくなっていたから、ちょっと焦りを感じてしまった」

「焦り、ですか？」

南條は「ああ」と答えると、美咲を自らの胸の中に包み込んだ。

「本当に、美咲は危機感がなさ過ぎて心配だ。——そんな事だと、俺ばかりではなく、他の男までも絶対に誘惑される」

「あの、言ってる意味が分からないんですが……？」

南條に抱き締められている恰好となっている美咲は困惑していた。

「本気で分からないのか？」

「はい……」

美咲が頷くと、南條の抱き締める力が緩んだ。

南條は美咲の頬をそつと撫でる。

「その表情があまりにも無防備だ」

そう告げると、美咲の唇に南條のそれを重ねてきた。

すぐに唇は離れるだろう。そう思っていたのだが、今日の南條の口付けはいつもよりも長かった。

完全に口を塞がれてしまった美咲は息苦しさを感じ、どうにか逃れようと首を振った。だが、南條はそれを許さず、それどころか口付けの深さを増していった。

しばらくして、南條は美咲から唇を離した。

解放された途端、力が抜けてゆくのを感じた。

「大丈夫か？」

美咲の身体を支えながら南條が訊ねてきたが、美咲は声を出す気力もなく、ただ首を縦に振った。

「すまない。つい……」

意識が朦朧としかけている美咲を改めて見て後悔したのか、南條はばつが悪そうに謝罪を口にした。

「だ、大丈夫、ですから……」

美咲はそう言つと、ゆっくりと身体を起こす。頭は未だにぼんやりとしている。

「どうしようもないな、俺も」

南條は自らを嘲るように、フツ、と小さく息を鳴らした。

「軽口を自分で散々叩いたくせに、急に変な危機感を覚えてしまうんだからな。——一瞬、藤崎とか言う男の事が頭を過ぎった」

「え？ どうしてですか？」

南條の言葉を、美咲はまだ理解出来なかった。

そんな美咲に対し、南條は、仕方ないな、と言わんばかりに微苦笑を浮かべながら、先ほどのように優しく頬に触れてきた。

「藤崎の奴も美咲に相当執心しているからな。お前は全く気付いていないようだが。」

前にも言ったが、俺は独占欲が人一倍強い。一度手にしたものは、例えどんな事があっても手放すつもりはない。——お前の事もな」
普段は無駄口を一切利かない南條だが、こういった時にはストリートに気持ちを伝えてくる。

（聴いてるこつちが恥ずかしくなる……）

全身の熱と早鐘を打ち続ける胸の鼓動を感じつつ、美咲はそんな事を思った。

一方の南條は、表情が全く変わらない。『緊張してないわけじゃない』という台詞は、到底信じられるものではなかった。

と、その時だった。

ドン、という大音量が耳に飛び込み、少し間を置いてから、夜空に大輪の花が咲き乱れた。

「始まったみたいですね」

美咲が言うと、南條は「そうだな」と頷く。

「場所的にはちょっと遠いが、ここからでも見られなくはなさそうだ。尤も、樋口さん達はもっと近くで見ているかも知れないが」

南條のこの台詞を潮に、二人は口を閉ざして暫し花火に見入っていた。

絶え間なく打ち上げられる花火達。夜空に色を添え、だが、すぐに儚く消えてゆく。

（私は、あんな風に消えないで、ずっと南條さんの隣にいたい）

美咲は強く願い、躊躇いながらも南條の手に触れた。

すると、南條も美咲の手を握り返してきた。

温かくて力強い手は、美咲に安らぎを与える半面、何故か切ない
気持にもさせる。

この手が離されたらどうなるのか。ふと、そんな事を考えてしま
った。

「南條さん」

美咲は南條に視線を注いだ。

南條も「どうした？」と美咲を見つめ返した。

「ずっと、私の側に、いてくれますか……？」

美咲の問いに、南條はわずかに目を見開いた。だが、すぐに笑み
を湛えながら「ああ」と頷く。

「俺はずっと、美咲の側にいる。そして、お前の幸せのためなら、
どんな事でもしてやる。——何があってもな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6619v/>

儚き花と永久の夢

2011年9月30日03時29分発行